レヴィナス『直観理論』における志向性概念について

豊田政和

序論

本論文の目的は、現代フランスの哲学者エマニュエル・レヴィナス（一九〇六―一九九五）の初期思想、とりわけ『フッサール現象学における直観理論』(1)における意識概念を定義することにある。

この著作において、レヴィナスは、認識における命題構成的な意識の働き（理論的意識）の優位性を、フッサール現象学における「客観化作用」概念に見出し、問題視する。そして、この問題を解決するため、作者は、ハイデガー存在論を導入し、独自の意識概念の解釈を提示することによって、非理論的意識（意志や感情など）によっても対象を構成できることを認めようとする。この解釈において特徴的なのは、フッサール現象学の存在論化にあるといえる。

だが、本論文は、この存在論化の当否を問うことではなく、この解釈によって示されるレヴィナス独自の意識概念

を正確に理解することにある。これには、二つの意味がある。第一に、この理解は、一九四〇年以降の初期著作群（例えば『実存から実存者へ』や『時間と他者』）で、レヴィナスが、フッサールの「志向性」概念とハイデガーの「現存在」概念を併用あるいは混同する理由の解明を可能にしてくれる。第二に、この理解は、『直観理論』で示されるフッサール現象学の解釈を、極端にまで押し進めた時に見出される問題を明らかにするための前提の提示を可能にしてくれる(2)。

議論の流れは以下の通りである。まず、『直観理論』における、レヴィナスによるフッサールの志向性概念の理解とそれに対する批判を明らかにする。そこで、レヴィナスの目的は理論的意識の優位性の批判であることが明らかになる（一）。次いで、レヴィナスが、一方でノエシスの概念を「自ら超越する作用」と解釈し、他方で「諸対象を前にした意識の現われ」を見出すことが直観であり、真理であると定義していることを確認する。ここで、レヴィナスは真理概念から表象を分離し、フッサールの議論を乗り越える準備をしていることが明らかになる（二）。最後に、独自の真理解釈を梃子に、レヴィナスは、言表を伴わない多様な対象構成を認める（三）。

以上の議論によって、レヴィナスが、理論的意識と非理論的意識を同等に扱おうとしたことが明らかになる。しかし同時に、この過程で示されるレヴィナスによる意識概念の解釈は、『存在と時間』のハイデガーにおける「現存在」概念に非常に近似したものとなっている。われわれは、ここで初期レヴィナスの議論において、「志向性」概念と「現存在」概念が並立して扱われる理由を見出すのである。

一　『直観理論』における志向性概念とその批判

レヴィナスは、フッサール現象学における志向性概念をどのように解釈し、批判したのか。この問いはフッサール現象学における志向性概念に関する、レヴィナスの問題意識を確認する手続きになる。とりわけこの節において、レヴィナスが、フッサールの志向性概念における理論的意識を批判していたことが明らかになる。

レヴィナスの理論的意識批判

『直観理論』第四章でレヴィナスは、『論理学研究』（以下、『論研』と略す）と『イデーンⅠ』の用語法を比較しつつ、「実践的あるいは美的範疇は、（…）純粋に理論的な範疇と同程度に存在を構成する」ことを明らかにしようとする（*TIPH*, 86）。そのため、レヴィナスは、フッサール現象学における「客観化作用」の再検討に向かう。

認識において、まず「対象の世界に属する」、「ヒュレー的与件」（感性的与件）が、意識に与えられる（87）。次いで、この与件を作用、つまり「生化する統握」（ノエシス）が、感性的与件に向かいこれをありありと捉え、意味を与え、存在するものとして妥当化する（措定、定立）。そして、捉えられた「ヒュレー的与件」は、命題化し述語を与えられ、「意識の相関者」（ノエマ）として認識されるのであり、これが直観と呼ばれる（88）。しかし、この相関者は、知覚された対象そのものではない。というのも、この相関者は、異なるアスペクトや知覚、想起、想像といった与えられ方の全体や述語を含む言表から成り立っているからである。いわば、ノエマとは、ある対象についての「諸述語と与えられている諸様態の複合体 complexité」なのである（*loc.cit.*）。

そして、この複合体は、ノエシスの諸様式に対応して区別される。例えば、同じ木を理解していたとしても、知覚と想起と想像の木は異なるように。ただ、ノエシスの諸様式の全てに対応する場合、ノエマは、「全きノエマ」と呼

ばれ（90）、「直観においてのみ実現される意味を表現している場合、「ノエマの核」（質量）と呼ばれ、「諸述語の支え」の役割を果たす（88-90）。

レヴィナスは、この図式を更に詳細に分析し、作用は、「表象」に基づくことなしに成立しないとするフッサールの見解に議論の焦点を当てていく（90）。表象とは、「諸作用が対象へ向かうために結びつかなければならない」要素である（91）。フッサールにとって表象は、言表による指示（名辞的作用）によって成立する。ここにどのような問題があるのか。もう少しレヴィナスに従い、表象の構造を分析する。

例えば、「SはPである」という判断の相関者（命題）があるとしよう。これは、「SがPであるならば、QはRである」という構文の前件として表現することもできる。ただ、この場合、「SはPである」は、命題ではなく、構文における述部に当たる後件と接続する名辞 nom の役割を果たしている。この分析におけるフッサールの発見は、「命題における名辞の役割を分析することで、名辞の原初的機能は、言表の主語であることに存することを見出した」ことにある（95）。つまり、「SはPである」は、命題の役割も、名辞の役割も果たすことができるのである。

では、この場合、命題と名辞は区別されるにもかかわらず、どうやって両者は区別されながら統一的に理解できるのか。それは、「同じ事態が、ある時には「多様な光線」において構成されている最中の綜合として与えられ、ある時には単一光線において既に構成された綜合として与えられる」という事実において理解できる（96）。例えば、パソコンが設置されている机をみて、「これは机で、その上に本とパソコンがのっている」ということもできるし、「本とパソコンがのっているこの机」ということもできる。どちらも同じことを言っているのだが、違いは意味（質量）の区別に存する（*loc.cit.*）。また、命題と名辞の間には差異とは別に、存在しているとみなす「定立的諸作用 actes thétiques」や、予期・想起また感情・意志などをともなった存在非存在を問わず対象を見立てる「中立化された定立

的諸作用 actes à thése neutralisée」といった性質の差異が存在する（90）[3]。こうした質量と性質の諸差異を、フッサールは、「客観化作用」の名の下で一括する（90）。これは何を意味するのか。例えば、「これはパソコンである」（命題）、「机の上に載っているパソコン」（名辞）、「あれはパソコン、であろう」（予期）、「あのパソコンは、美しい」（感情）といった表現による認識があるとする。これらの場合、いずれにおいても認識は理論的意識であることを意味する。というのも、「客観化作用の概念は、言表に負っているからである」（97）。この立場は、『論研』に顕著で『イデーンⅠ』で若干修正されたと考えられる。だが、レヴィナスは、結局この立場は放棄されていないと考える（98）。そして、『直観理論』第五章において、レヴィナスの批判はまさしくこの点に向けられる。

もし、『イデーン』が、『論研』にくらべて、表象が全ての作用の基礎であるというテーゼを変更したとしても、この本（『イデーン』）は、われわれが以下のように述べることを妨げるほど甚だしく変わったわけではない。それは、各々の存在定立において、表象的、ドクサ的定立が含まれているということである。それゆえ、すぐさまフッサールにおいて、（対象の）存在は理論的生の、客観化作用の明証の相関者として、示されることを明らかにせねばならない。そこから、直観に関するフッサール的概念は、主知主義に汚染されており、そして恐らく、あまりにも狭い。というのも、理論的生から由来しないカテゴリーを存在の構成へ導くためのフッサールの試みは、この理論的態度の優位やその普遍性を取り除くに至らないからである。価値や有用さの諸特性は、ただ、表象の相関的な存在の現実存在への接ぎ木としてのみ存在しうるのである（141-142）。

例えば目の前のコップに入っているコーヒーを飲んでいる時、われわれは、「これはコップだ」と言明して理解しているわけではない。コップと命題的に理解せずとも、手にとってコーヒーを飲むことはできる。また、コーヒーを

作ってくれた人と親しい場合、飲んでいるコーヒーに何らか別の感情が働く場合もあろう。対象把握の基礎に表象を据える客観化作用の概念は、このような事態を十分に説明することができない。つまり、レヴィナスが批判するのは、あたかも「接ぎ木」のように、全ての認識が表象によって基礎づけられていると考える客観化作用の優位に他ならない。

こうして、フッサールを批判するレヴィナスは、認識の複雑な局面を正確にそして包括的に捉えるため、「理論的対象の存在様式とは別の存在様式」を語ろうとする（98-99）。

二　レヴィナスによる志向性概念と真理概念の解釈

レヴィナスは、表象による基づけ構造とは異なる対象把握のモデルを示そうとする。本節では、このモデルを提示するために必要な前提、とりわけレヴィナスによる志向性概念と真理概念の解釈を確認することにする。議論のベクトルは、主観性概念の側面と直観概念の側面に分かれる。

直観の手前

『直観理論』第三章で、レヴィナスは、直観が成立する直前の段階に目を向け、ノエシスがヒュレー的与件に向かう過程を分析している。ヒュレー的与件は、一方で「対象の世界に属する」が（87）、他方で外的対象そのものとは

「根本的に異なる」(67) ので事物ではない。だが、もしこれを理解するために、外的事物と内的心像の対応関係を設定したならば、古典的な主観客観関係を設定することになり、主観か客観かのいずれかにヒュレー的与件を当てはめることになってしまう (*loc.cit.*)。だがこれは、認識する対象はどのように外界と一致するのか、という古典的な問題へと回帰することになる。そこで、レヴィナスは、フッサールを踏まえ「志向性」概念を提出することでこの問題を回避しようとする。

次のことを強調せねばならない。「ヒュレー」概念のもとでまとめられている内容に固有な統一原理、それは、われわれの感覚から由来する外的な特性 (…) ではなく、内的な特性である。それは、ヒュレーの概念を、感覚与件を越えて、情動性と意志の領域へ拡張させてくれる。だが、意識の流れは、単にヒュレー的層からのみ成立しているのではない。われわれは、そこで、ヒュレー的現象に超越的意味を賦与する生化作用を区別する。(…) この作用は、一方でヒュレー的与件の要素と同一の存在様式をもち、(…) 他方で意識の流れに意味を与えるのであり、それは作用でない何者かを「志向」するのであり、自ら超越する se transcender のである (68)。

ヒュレー的与件は、「外的世界に属する何らかのもの quelque chose du monde extérieur」なので、われわれの意識のうちにはない。例えば、本棚に収められている書物を、「本」として理解した場合を考えてみよう。この場合、感性的に与えられた書物に「本」という意味が与えられているのである。換言すれば、「ヒュレー的現象に超越的意味を賦与する生化作用」が働いているのである。そして、この作用が「ノエシス」と呼ばれる (68)。

いうまでもなく、書物に「本」の意味を付与している時、われわれの意識は書物に向いている必要がある。この事

態をレヴィナスは、ハイデガーにならい、意識が「自ら超越する」と考える。つまり、レヴィナスが考えるノエシスは、ヒュレー的与件に意味を与える働きであると同時に、意識がヒュレー的与件に超越する働きを意味しているのである。

このようなノエシス解釈は、必然的にノエシスを包括する「志向性」概念にも定義の変更をもたらすことになる。それは、「志向性は、真の超越作用であり、あらゆる超越の原型」として定式化される（69）。この定式において、意識は、容器のようなものではなく、いわばヒュレー的与件に向かっているベクトルとして考えられている。だからこそ、レヴィナスは、「実体主観」を否定し、「志向性は、主観の主観性そのもの」と述べるのである（70）。

ところで、このような議論の運び方は、ベクトルとしての志向性が到達する地点とノエシスがそこと結合する様相についての記述を要求することになろう。既に述べたように、ノエシスが到達するのはヒュレー的与件である。ならば、結合する様相とは、ノエシスによるヒュレー的与件の生化の場面に他ならない。フッサール現象学において、生化が起きるのは直観の場面である。それゆえ、レヴィナス的志向性解釈の議論を完遂するために直観概念にまで議論を拡張する必要がある。実際、『直観理論』第五章でレヴィナスは、直観概念を取り上げている。

直観の局面

「自ら超越する」ノエシスは、どのようにヒュレー的与件に到達し、結びつくのか。この問いは、直観の分析を通して解決される。レヴィナスは、『論研』の用語を用いつつ、直観の詳細な分析を試みる。

直観は、何事かを思惟し意味を付与する作用（意味作用）と何事かを理解する作用（直観作用）に区分される。こ

の両者は、与えられるヒュレー的与件の度合いに応じて変化する（112-113）。レヴィナスは、この変化を次のように解釈する。まず、ヒュレー的与件が生き生きと与えられ（充実）、直観が可能になること（充実化）を「現実化 réalisation」と訳し、「意味（意識の対象）が現実化し」、その対象が「見えるようになる devenir vu」という意味合いを含ませる（112, 119）。これにより、「対象そのもの en personne」が見えるようになる「事実 fait」を直観作用と定義し、さらにそれを「対象そのもの」への「到達 atteindre」と呼ぶ（112）。

> 直観が、その対象を思念するきわめて単純な思惟を現実化するということ、それは、われわれが対象に直接接近し、到達するのは直観においてであるということである。何物かを思念し、到達するということの間に差異のすべてがある。意味志向は、自分の対象をいささかも所有しない。（…）意味志向は、直観に固有であるこの充実を必要とするものとして特徴づけられる（103-104）。

直観において、意識は対象に到達しているとレヴィナスは考える。これは、範疇的対象をはじめとする抽象的対象についても同様である。しかし、ここで問題が起きる。直観が対象への到達だとするのならば、直観が成立するために到達すべき当の対象が存在していなければならないことになる。ではどのように、実在しない抽象的対象にこの定義が適用できるのか。レヴィナスは、反省による意識の分析の際に、対象が存在しているかどうかは問題にならず、それらの対象が意識に与えられる様式が問題であると主張し、問題を「存在」の問いへと変換する。長くなるが、重要な個所なのでそのまま引用する。

認識は、対象の客観性そのものとかかわる。(…)「いかにして」という反省的態度において、いかにして対象は与えられるか、対象とはどういうことか、ということが問われる。そして、(対象の)存在は、われわれの認識的、また意志的、情動的な生の様々な諸対象と混ざってしまうse confondreがゆえに、対象の客観性の研究は、(意識の)存在の現実存在existenceについての解明へと還元される。われわれは、(対象の)存在そのものを、意識におけるノエマの形式において見出している時に、もはやほかの何ものもない認識理論の様に、何らかの仕方で、認識的生の何らかの出来事の結果において、われわれはいかにして対象の認識に到達するか、あるいは、われわれが認識する対象が(対象の)存在かどうか、ということはもはや問わない。われわれの問題は、問題となる各々の特殊な場合における、存在の意味なのである。このように、(対象の)構成についての諸問題と共に、(意識の)存在être の問題が立てられる。対象の構成を分析すること、それは、対象へと向いている意識の諸志向を追跡することであり、諸志向が対象に付与している意味を追跡することである。(意識の)現実存在は、意識が自らの対象と出会う様式でしかないし、この対象が意識の具体的生において果たす役割でしかない。というのも、存在の源泉そのものが見出されるのは、生 vie においてだからである。(188-189)

レヴィナスは、「意識の存在」を事物の存在と異なる仕方で存在することを証明するために意識を抽象的に個別に扱うことを拒絶し、その存在様式つまり意識の「現実存在」から導き出すことを試みる(60)。そして、その様式は、意識の対象と関わっている志向性にほかならない(70)。つまり、志向性概念は「意識の現実存在」と読み替えられ、ここから遡行的に「意識の存在」を証明する役割を果たすのである。それゆえ、感性的であれ抽象的であれ対象の存在は問題にならず、それらの対象が与えられているという様式だけが問題になる。要は、レヴィナスは、意識の存在の問いを立てつつ、①意識の対象(志向的対象)と対象の存在の同一視し、②対象の存在はもっぱら意識の現実存在

の側で規定される、と考えたのである（216-217）。

ノエシスが、ヒュレー的与件と結びつきノエマになる場面は、自己意識の反省によって明るみに出される。反省によって、意識の対象が「何か」が明らかになるのではなく、意識の対象が「いかにして」与えられるかが明らかになる。ここで、注意せねばならないのは、レヴィナスが、ハイデガーの「存在の問い」を持ち込み、反省によって生じる分析の変化を、意識の「存在の現実存在についての解明へと還元」することと解釈していることである。レヴィナスは、この解釈の妥当性を対象の「存在」と「生の様々な諸対象が混ざって」いることから認める。つまり、この還元の前提には、意識の対象の存在様式と対象の存在の同一視が存在しているのである（59）。

抽象的対象の存在を問うに当たり、この還元は、レヴィナスに一つの回答を与えることになる。それは、「存在の源泉そのものが見出されるのは、生において」である以上、抽象的対象の存在も「生きられて」いれば、換言すればこの対象と相関する志向性が成立していれば、その存在は正当化されるという回答である。

真理の再定義

しかし、このような回答は、われわれにいくつかの疑問を引き起こさせる。まず第一に、直観が対象への到達だと認めても、直観の構造に表象が組み込まれている以上、これまでの議論は、表象優位の批判になりえないのではないかということ。第二に、意識が対象に到達する働きとみなされ、反省の分析において、対象の存在が意識の存在に還元されるならば、意識も対象も自体的に存在するものとして認めないことになる。ならば、意識と対象はどこに見出されるのかということである。

これらの疑問を解決するように、レヴィナスは、ハイデガー存在論から「世界」概念を導入し、「意識の存在」と「世界」の相関関係を設定し、そこに真理を認める。

主観は、現実存在するexister限りにおいて、世界の前に既に現われているse trouve déjà en présence du monde存在である。そして、意識の存在を構成するのは、このことである。従って、真理は、主観の表象と存在する客観の一致として理解される、思惟と事物の一致に存することではない。なぜならば、根源的にわれわれは自らの表象に向けられているのではなく、われわれは、（意識の）存在を表象しているからである。真理の第一次現象が成立するのは、この諸対象を前にした意識の現われにおいてである。われわれが、「思惟と物の一致」と呼ぶものは、この第一次現象においてのみ可能である（133）。

フッサールは、真理と理性のこの第一次現象を求めていたのであり、彼は、それを存在に到達する志向性と理解された直観において見出したのである。（134-135）

これまでの前提を踏まえ、ここでのレヴィナスの議論を図式化すると以下の通りになる。まず「意識の存在」を、「世界を前に既に現われていること」と前提し、「世界」と相関する存在として認める(4)。だが、「意識の存在」はそれ自体によって確証されない。そこで、確証する要素として、「諸対象を前にした意識の現れ」としての意識の「現実存在」（直観）が成立する「限りにおいて」、これを認める（133）。つまり、レヴィナスは、直観の成立という事実から、「意識の存在」と「世界」の相関関係を遡行的に前提するのである。

だから、レヴィナスにとって真理は、単に意識（主観）の側にも、対象（客観）の側にもない。それは、「意識の

存在」と「世界」の相関関係に存し、そのことは直観によって確証されるのである。換言すれば、直観による「意識の存在」と「世界」の相関関係の確証が、レヴィナスの考える「思惟と物の一致」としての「真理の第一次現象」、あるいは「出会い rencontre」と呼ばれる事態である（62, 139）。

このように、レヴィナスによる志向性解釈の特徴は、「対象の存在」の問いを「意識の存在」の問いへと変換し、更には真理の成立を「諸対象を前にした意識の現れ」と定義したことにある。そして、この定義を背後で支える前提として機能しているのが、「意識の存在」と「世界」の相関関係である。つまり、レヴィナスは、真理が成立する最終的な審級として、「意識の存在」と「世界」の相関関係に設定したのである。

これは、レヴィナスに客観化作用の優位性を切り崩す可能性を与えることになる。では、レヴィナスはどのようにこの優位を切り崩していったのか。

三　志向性概念の拡張

本節では、レヴィナスが解釈した志向性概念、真理概念を踏まえ、彼が意志的、情動的諸要素（非客観化作用）を客観化作用と並列に論じていく過程を分析する。これは、レヴィナスの解釈する志向性概念が、非客観化作用による対象構成も認めた、フッサールのそれよりもより外延が広い概念として構想されていることを意味する。

ノエシスの多様な形式

レヴィナスは、「世界」概念の導入により、真理の最終的な審級を「意識の存在」と「世界」の相関関係に置き、これが直観によって確証されることを「真理の第一次現象」と呼ぶ。だが、ここでわれわれは、またしても、一つの疑問にぶつかりはしないか。それは、「意識の存在」と「世界」の相関関係に真理の審級が設定されたとしても、それを確証するのが直観である以上、実質的に真理は直観によって成立しているのではないか、ということである。もしそうならば、表象は、直観と不可分であるが故に、依然として真理概念と不可分であることになろう。

この疑問に応えるように、レヴィナスは、『イデーンⅠ』の議論から、表象を伴わない直観を見出そうとする。例えば、われわれは、ある飲み物が欲しい時はそれを「飲みたいもの」として認識する。また、誰かを愛している時はそれを「愛されるもの」として認識している。『イデーンⅠ』のフッサールは、これらの状況を、視線はその相関者である対象に向けられ、「その対象についての極めて種々様々な意識作用を完遂する」ことであると記述する（*III*, 168-169）[5]。一方、レヴィナスは、この一節から、意識の現実存在のあらゆる形式、特に「実践的、美的生としての情動的生を対象への関係によって特徴づけ」ようとする（*Lévins, op. cit.*, p.73）。

この引用の最後に非常に重要な現象が浮き彫りにされている。つまり（それは）「極めて種々様々」（という箇所にある）。それが言わんとしているのは、志向性は意識のあらゆる形式において常に同一的で、現在し、対象に関係する唯一の機能を行使するのではないということである。一方、主観的現象に置かれている独特に情動的で、意志的な諸要因は、常に同じ志向に付け加わる。志向性そのものは、これらおのおのの場合に従って異なっている。この作用において意志的、情動的諸要素は、自らの外にある何者かに向かっていく全く特殊な方法、（つまり）自ら超越する特殊な方法なのである（*loc.cit.*）

われわれは、日々生きるなかで何かを知る時、いつも命題的に「これはペンである」という仕方で考えて知っているのではない。例えば、子供の一群を見た時に「ああ、鬱陶しいな」と思ったとしよう。その時、われわれは、個々の子供を「彼は子供Aだ、彼女は子供Bだ…」と命題的に把握してから、それに感情的述語を付加しているのではなく、その一群を端的に鬱陶しい対象として感じ、把握しているのである。あるいは、フッサールのように子供たちを愛しい対象として把握してもよかろう（III, 251-252）。また、全く無関心の場合は、物にしか見えない場合もあろうし、個々の子供を命題的に把握しようとする場合も恐らくあろう。こうして、子供の一群の場合一つとってみても、志向性が「極めて種々多様」であることがわかる。

しかし、ある対象に意味を付与することは、表象に基づいて対象を把握することではなかったか。ならば、前段の例もやはり命題的な把握が前提されているのではないか。そうではない。

> 志向性のフッサール的概念は、非常に広い意味あいに存する。つまり、それは、意識が自ら超越し、意識ならざる何ものかに意識が意味をもつという非常に一般的な事実を表現しているのである。しかし、「一つの意味をもつ」ということは、表象することと等価ではない。愛する作用は意味を持つ。だが、それは、愛する作用が愛される対象の表象を含んでいるということではない。（…）愛される対象の固有性は、まさに純粋に理論的な表象に還元できない志向たる愛する志向において与えられていることに存するのである。（74-75）

レヴィナスは、志向性における意味を付与することを「表象に還元されない」、非常に広い意味で理解し、しかもそれは「志向において与えられることに存する」と考える。例えば、「愛されるもの」があるとするならば、それは

「これはAである」と言表し、そこに感情の要素を付加する必要はなく、もっぱら「愛しい」という感情が働けば、それで「愛しいもの」としての意味は付与され、存在するのである[6]。だから、「意志的、情動的諸要素は（…）自ら超越する特殊な方法である」（76）ということは、意志や情動を含む全ての諸要素は、それだけで対象を措定する働きであることを意味している（74）。

しかし、表象による基礎付けなしに多様な対象が定立されることを認めるならば、「おのおのの場合に従って」、対象の構成はその都度変化し、同じ対象に対して複数の直観が成立し、場合によっては対立が起きるのではないだろうか。そうではない。第二節でレヴィナスが、「意識の存在」と「世界」の相関関係を前提にし、真理を「諸対象を前にした意識の現れ」に見出していたことを思い出そう。真理は、対象の側にではなく、「意識の現実存在」の成立を意味する「意識の現れ」にある。そして「意識の現実存在」は、その各々が「意識の存在」と「世界」の相関関係を確証する要素でしかない。だから、同じ対象に対して異なるタイプの直観が成立したとしても、「意識の存在」と「世界」の相関関係は揺らぐことはない。例えば、ルノワールの絵画を見て、「これは猫を抱く少女の絵だ」と命題的に認識するのと同時に、その少女の美に没頭することも意識と世界が共にあること（「意識の存在」と「世界」の相関関係）を確証しているのである。

むしろ、意識の対象が、意識の諸要素に従ってその都度異なる姿（理論的、意志的、情動的など）をもって現われるということは、それら全ての姿を確証している存在として「意識の存在」と「世界」の相関関係を確証しているのである。それゆえ、意識の対象は、あらゆる「生きられる仕方」によって存在することが認められた対象として、同等に尊重されるべきなのである。

具体的生――世界の現実存在の源泉である――は、純粋な理論ではない。フッサールの議論において、理論が全く特別な地位を持っていたとしても、である。具体的生は、行為や、感情や、意志、美的判断、関心、無関心などの生である。その時、この生に相関する世界は、確かに、理論的観想の対象ではなく、意志された、感覚された世界、行為や美や善や醜さ、悪意の世界である。これら全ての概念 notion は、同じ程度に世界の現実存在を構成するのであり、例えば空間性の純粋に理論的な諸範疇と同じ程度に世界の存在論的諸構造を組成するのである（75-76）。

この枠組みに従うならば、客観化作用は、いわば命題構成的な意識の生（現実存在）という名の下で他の意識の生（現実存在）と並列に置かれ、相対化されることになる。それは同時に、命題的、意志的、情動的といった対象が等しく存在していると認められることを意味する。

こうして、これまでの議論を通して、レヴィナスの志向性解釈を知ることができる。つまり、レヴィナスは、認識において客観化作用だけが特権的地位を占めることに反対し（一）、次いで志向性とりわけ直観と真理を表象とは無縁の位相で定義し（二）、最後にノエシスに付加される意志的、情動的諸要素によって構成される対象がそれ自体で存在する権利を持つことを認めたのである（三）。

結論

こうしてわれわれは、志向性が客観化作用に依存せずとも成立する、とレヴィナスが解釈していることを確認し

た。レヴィナスによる解釈の特徴は、真理概念を「諸対象を前にした意識の現れ」と定義し、真理概念を表象から切り離したことにある。それによって、表象（言表）を伴わない意志的、情動的、実践的な認識の可能性を認めるのである。そこから、レヴィナスは、理論的意識（客観化作用）と意志や情動による意識の働きを、対象構成の働きとして等しく扱うのである。ここで、われわれは、レヴィナスが志向性概念をフッサールのそれより拡張しようとする意図を見出すのである。

最後にここで本来の目的を達するために、この解釈がもつもう一つの側面に目を向けておく必要がある。それは、『直観理論』のレヴィナス自身が公言しているように、ハイデガー存在論の影響である（14-15）。これは、以下の四点に顕著である、①意識を「超越」の働きで、かつ世界と共にあることを明らかにした（*Heidegger*, 1927, p.52-59, 61）[7]。②「存在の問い」の導入（5-9）。ただし、レヴィナスの場合は「意識の存在の問い」である。③「存在」と「現実存在」の区別の導入（11-16, 41-46）。「世界」概念の導入（63-67）。（以上は二において論じた）⑤理論的意識を相対化したこと（三において論じた）（61）。

これらの定義は、ハイデガーの「現存在」概念、ひいては「世界内存在」概念から由来しているのは間違いなかろう。ラヴィーニュ（*Lavigne, op. cit.*, p.64-66）の指摘通り、レヴィナスは、「志向性」概念に「現存在」概念を読み込もうとしたのである。これらの解釈は、純粋なフッサールの理解からすれば、フッサールのテキストに相当の負荷をかけていることは間違いない。また、このような解釈は、レヴィナスの「志向性」概念と「現存在」概念の関係の理解について重大な疑義をもたらす[8]。

確かに、レヴィナスの「志向性」と「現存在」に関する理解は、疑問符がついても仕方のないものである。しかし、一方で注意しておかなければならないのは、レヴィナスは、決して「現存在」概念の導入によって、ハイデガー

に倣い意識概念を放棄したわけではない、ということである。むしろ、レヴィナスは、終生にわたり意識概念の擁護に努めている（*Benoist*, 2000, p.106-122）。この点を踏まえ、レヴィナスの思想展開の観点から彼の「志向性」解釈を検討する場合、ラヴィーニュに与することなく別の仮説を立てるべきではないか。それは、レヴィナスは、「志向性」概念と「現存在」概念を踏襲しつつ、彼独自の意識概念を構築しようとしたのではないか、という仮説である。

だとするならば、『直観理論』におけるレヴィナスの「志向性」解釈は、誤読というよりも、本来外延が異なるはずの二つの概念を統合させ、彼独自の新たな意識概念を構築する最初の試みと読むべきではないのか。この仮説に立つとき、『実存から実存者へ』を始めとする初期レヴィナスの議論に見られる「志向性」概念と「現存在」概念の併記の理由も、中期の「表象の崩壊」論文で、レヴィナスが「志向性」概念と「現存在」概念を、「状況内主観 sujet en situation」（*EDE*, 131-132）[9]という概念で統合していることも、新たな意識概念を構築するための過程として理解することが可能になる。

つまり、新たな意識概念の構築を目指す『直観理論』のレヴィナスは、客観化的作用の優位を認めたフッサール的志向性概念から離れ、より外延の広い志向性概念を構築しようとした。そしてその結果、ハイデガー的「現存在」概念に近似した概念を構想するにいたった。だからこそ、例えば『実存から実存者へ』において、この両概念が並立して登場した時にこれらの概念は区別して読まれるべきではなく、これらの外延はほぼ同じであると読まれるべきなのである。

参考文献

Lévinas, E.
La théorie de l'intuition dans la phénoménologie de Husserl, Paris, Vrin, 1930.
En découvrant l'existence avec Husserl et Heidegger, Pris, Vrin(5ed), 1994.

Husserl, E.
Husserliana III, Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen philosophie. Erstes Buch : Allgemeine Einführung in die reine Phänomenologie, W. Biemel (ed.), 1950 (K. Schuhmann, 1976).
Husserliana IX : Phänomenologische Psychologie, W. Biemel (ed.), Martinus Nijhoff, Den haag, 1962
Husserliana XIX, 1 : Logische Untersuchungen. Zweiter Band : Untetsuchungen zur Phänomenologie und Theorie der Erkenntnis. Erster Teil, U. Panzer (ed.), 1984.
Husserliana XIX, 2 : Logische Untersuchungen. Zweiter Band : Untetsuchungen zur Phänomenologie und Theorie der Erkenntnis. Erster Teil, U. Panzer (ed.), 1984.

Benoist, J. : « Le cogito lévinassien : Lévinas et Decartes » : in *Positivité et Transcendance*, Paris, Vrin, 2000.
Bernet, R. : *La vie du sujet*, Paris, PUF, 1994.
Lavigne, J-F. : « Lévinas avant Lévinas : L'introducteur et le traducteur de Husserl » in *Positivité et Transcendance*, Paris, Vrin, 2000.
Heidegger, M. : *Sein und Zeit*, Tübingen, Niemeyer, 1927/1986 (16th ed).
Murakami, Y. : *Lévinas phénoménologue*, Grenoble, Jêrome millon, 2002.
小手川正二郎「レヴィナスにおける還元の問い」、『フッサール研究』第二号所収、二〇〇八年。
澤田哲生「若きレヴィナスにおけるフッサール現象学：『フッサール現象学における直観理論』から」、日仏哲学会発表原稿、二〇〇八年。

豊田政和「レヴィナス『直観理論』における真理観とその帰結について」、二〇〇九年度関西哲学会発表原稿、二〇〇九年。

(1) Lévins, E., *La théorie de l'intuition dans la phénoménologie de Husserl*, Paris, Vris, 1930. 引用の際は、*TIPH* と略す。

(2) これについては、拙論（豊田、二〇一〇年）において論じたので、そちらに譲る。

(3) レヴィナスは、『論研』第五研究（XIX, 477-490）の議論を踏襲して客観化作用の議論を行っているが、その中に『イデーンI』（*III*, 222-239）の用語が混在している。ここでは、レヴィナスに忠実であることを目的としているので、この混在をそのままにしておいた。

(4) 同様の議論は、p. 73, 139. にも見られる。

(5) Husserl, E : *Husserliana III, Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen philosophie. Erstes Buch : Allgemeine Einführung in die reine Phänomenologie*, W. Biemel (ed.), 1950 (K. Schuhmann, 1976). 以後、フッサールの引用は、フッサール全集（フッセリアーナ）から行う。表記は、巻数は英数字、ページ数はアラビア数字表記とする。

(6) というのも、レヴィナスは、「存在する事実そのもの」を「そこで見出されること se trouver là」と考え、対象が存在する条件を非常に緩く設定しているからである。

(7) Heidegger, M. : *Sein und Zeit*, Tübingen, Niemeyer, 1986 (16th ed).

(8) これは、『ブリタニカ草稿』（IX, 238-）の執筆過程で超越論的主観性概念と現存在概念をめぐり、フッサールとハイデガーが対立していた事情を知っていれば当然出てくる疑問である。ちなみにこの両概念の理論的関係について緻密な検証を行ったものとして、ベルネ（*Bernet*, 1994, 39-64）があげられる。また、『ブリタニカ草稿』でのフッサールとハイデガーの対立を踏まえ、本論文とは異なる問題系を『直観理論』に読み込んだ論文に小手川（二〇〇八、二三九頁―二五〇頁）が挙げられる。

(9) Lévins, E. : *En découvrant l'existence avec Husserl et Heidegger*, Pris, Vrin(5ed), 1994.